

# 〔七〕 日本文化研究所での共同研究

## 世界問題研究所の兼務経験

京都産業大学へ赴任二年目の昭和五十八年から、「世界問題研究所」の兼務部員を委嘱された。この研究所は、大学創立の同四十年から、東京の野口英世記念館で月例会を開き、初代学長荒木俊馬<sup>としま</sup>博士や国際政治学者若泉敬教授ら大学の主要メンバーが参加されていた。

しかし、二代学長の柏祐賢<sup>かしやせいかた</sup>博士は、これを学内に移して、京都学派の大島康正教授を所長に据え、各学部と教養部の専任から兼務部員を選び、堅実な運営に切り替えられた。

そこで、私が兼務した十二年間（平成6年度末まで）にも、年十回の月例研究会と夏休中の合宿研究会には原則皆出席した。当時は統一テーマを設けず、各人の専門に即した研究成果を他分野の先生方にも判るよう口頭発表し、自由な質疑応答を交わした。

これは、各学部とか専門を越えて教員が親しくなり知的交流を深める有意義な場であった。とりわけ大島所長や次の佐藤吉昭所長およびイタリア人で日本文化にも詳しいヴルピッタ・ロマノ教授や坂本吉之教授などとの率直な意見交換は楽しく有益であった。

## 日本文化研究所の基本テーマ

ところが、前述（第五回参照）のとおり、私は平成七年春から法学部を離れて（ゼミ以外の授業は継続）新設の日本文化研究所へ移され、初代の所長（一般教育研究センター長兼任）を務めることになった。しかも、それが三期九年にも及んだのである。

当初は、所長と共に専任の研究員が三名（塩田博子・林隆・村上二三各教授）、兼務員が数名、事務員も三名（原田守光・大野木繁太郎両氏と女性一名、みんな本当に協力的であった。

とはいえ、京都洛西の国際日本文化研究センターなどのような高度の専門家が大量に潤沢な予算の使える国立の研究機関とまったく異なる。それを承知で何をすべきか。着任早々所員と協議して、共同研究の基本テーマを定めた。

その一つは、地元の特化したA「京都の伝統文化に関する研究」であり、もう一つは、学際的なB「日本文化の国際交流に関する研究」である。このうちAは、私が所長を退任した後も次に述べる二つの研究会を続けている。またBは、二代所長井上満郎教授・三代所長森博達教授・四代所長宮川康子教授を各代表とする研究会へと受け継がれている。

なお、当研究所では月例会や合宿研究会を行い、所報『あふひ・AOI』に活動報告を載

せ、紀要に研究成果を収録してきた。それには世界問題研究所の兼務経験が役立っている。

### 賀茂祭関係絵巻の収集と研究

京都はミヤコ（宮処）として千年以上の歴史を有するから、伝統文化といっても限りがない。従って、当研究所のテーマAは、大学の立地する洛北賀茂を中心とし、とくに賀茂社・賀茂氏・賀茂祭など賀茂文化の研究を柱とした。

そして、当初から努めてきたのが重要な資料の収集である。幸い大学当局の理解を得て、上賀茂・下鴨両社の古絵図、賀茂社家の記録類、とりわけ『賀茂祭行粧絵巻』『賀茂臨時祭絵巻』『異形賀茂祭絵巻』『賀茂祭草子』『賀茂神事』『賀茂競馬絵図』など数十点を購入することができ、それらの所蔵・保管を総合図書館に委ねた。

すると図書館から、そのうちで見て判り易い絵巻をデジタル化し、インターネット上にも公開できるように求められた。そこで、コンピュータ理工学部の黒住祥祐教授や京都国立博物館の若杉準治部長など数名の専門家に指導を仰ぎながら、基礎的な作業と研究を進めてきた。その結果、おもな絵巻類は本学図書館の貴重書デジタル・アーカイブスを開けば、いつでも誰でも閲覧可能となったのである。

## 後桜町女帝宸記の解説と翻刻

京都の伝統文化として最も注目すべきものは、御所内の東山御文庫に架蔵される御物である。約二百箱すべて今なお「勅封」とされ、天皇陛下のお許しをえないと拝見できないが、宮内庁書陵部で順次マイクロフィルム撮影が進められている。

そこで、私どもは江戸後期の後桜町女帝（1740～1813、在位1762～1770）により書き続けられた宸筆の御日記をフィルムで頒布していただいた。しかし全部で四十冊以上あり、しかも女性の崩し文字は容易に読み解けない。

そのため、私の所長在任中に東北大学から招いた近世史専攻の若松正志教授（現在文化学部所属、教学センター長）を幹事として、学内外の研究協力者十余名に宸記の解説を分担してもらい、それを月例研究会で検討し、さらに今江廣道國學院大学教授（歿後は宍戸初男同大講師）の指導を仰いできた。

その結果、同天皇の践祚前後から即位式、および「明和」改元を経て大嘗会が終了するまでの約二年分を読み解き、その翻刻に若干の解説も加えて、順次紀要に掲載している。

記事はきわめて多彩で面白い。特に女帝でも大嘗祭など神事に臨まれた事実が判明した意

義は大きい。また協力メンバーの飯塚ひろみ同志社女子大学講師が翻刻中の御製集も、月つき次なみや法楽ほうらくの和歌会に関する宸記の記事と照応しており、貴重な新史料といえよう。

### 京都検定一級合格者の研究支援

この日本文化研究所では、初め上述の人的な構成（村上二三教授の急逝後、和歌文学研究者の小林一彦教授着任）により、月例会の開催も所報・紀要の発行も順調に続けてきた。しかし数年後から大学の組織改革で、研究所の名目専任は所長のみ（他は学部教員の兼務）となつてしまい、従来のような運営が難しい。

一方、平成十七年度から京都商工会議所の要請により、井上所長のもとで「京都検定」の一級合格者で更に上を目指す方々を客員研究員として受け入れ（毎年二十数名）、テーマにより学内所員が分担して助言・指導することになった。とても熱心で優秀な方が多く、むしろ私どもが刺激を受け学ぶことも少なくない。

ただ、それに伴って会務が次々とふえた。そこで同二十年から非常勤の研究補助員として篠田孝一君（法学研究科で近代法制史専攻）が、三年間献身的に手伝ってくれた。私立大学における研究所の役割と具体的な在り方について、あらためて考え直す必要があるう。